

現実可能な想像とある物を年かす

城北中 三年 多田宙史

僕はこの計画を聞いて新しい物を造るので
はなく今あるものにつけくわえていくスタイル
ルがいいのではないかと思つた。そこで自分
が提案するのは乙川に無数にある桜の木の下
の斜面に長い木製のやぐらをとりつけるのは
どうかと考える。

なぜそう考たかと言つて道路の拡張案など

ではどうしても乙川をうめたり今ある緑をけ

ずたりしなけばならない。また公園など

を作ることも乙川のどう水時にそれがながさね

てしまつ可能性も充分に考えうねる。しかし

この案であれば花火の時期にできる花火やぐ

らの縮小は人だと考えてもうえればわかるよ

うに取りはずしもかのうでさらに今ある物を

いっさいくずす必要がない。この点からせ

ち後のかたりやせつちの予算も他の案のもの

よりも安くできると思う。そしてこの案の利

点はコストとさく減だけではなく次にたげること

とがどきることで。他の案ではそれを作って
 しまつて次にやりたいことができてそれを
 じつこうするにはそれをわすれなければならないし
 かしこめなうば一部かいたいなぞり人きまう
 へんにたいおうしていくことができあふ
 したがつて自分はこのリビエフロント計画
 を二時的にやるのではなくその時どきのじよ
 うきょうにあおせて作り上げていくそんな
 きえをまず初めに作っていくのがいいのでは
 ないかと思う。そのためにこの拡張性にして人
 だ僕のアイデアはどうか。